

一般財団法人日本アジア振興財団（JAPF）

2015年春期インターンシップ論文集

期間：ベトナム・カンボジア 2015年2月22日（日）～3月5日（木）
カンボジア 2015年3月1日（日）～3月8日（日）

対象国：ベトナム社会主義共和国、カンボジア王国

参加人数：32名

男女割合：男11名、女21名

日本国籍者：31名

日本以外の国籍者：1名（中国国籍）

参加大学：岩手大学、関西学院大学、関西大学、武庫川女子大学、追手門学院大学、近畿大学、同志社大学、京都女子大学、京都産業大学、神戸市外国語大学、大阪府立大学、立命館大学、金沢工業大学、上超教育大学、東京学芸大学、法政大学、慶應義塾大学、明治学院大学、東京外国語大学、熊本大学、福岡大学、久留米大学

帰国後の活動：（関西での修了式及び事後研修会）

日時：3月24日（火）14：00～16：00

場所：在大阪カンボジア王国名誉領事館、大阪市

（東京での修了式及び事後研修会）

日時：3月18日（水）16：00～17：00

場所：日本アセアンセンター



一般財団法人日本アジア振興財団
Japan Asia Promotion Foundation

発行：一般財団法人 日本アジア振興財団学生委員会

「ベトナム・カンボジアスタディーツアー12日間を通して思ったこと」
京都産業大学・外国語学部 2年

私はこの旅に参加して本当に良かったです。一緒に学んだメンバーやガイドさん、現地の人たちとの出会い、研修先での貴重な経験、新しい価値観など、この12日間で得たものが多かったです。戦争証跡博物館から始まったベトナムでの研修では、枯葉剤の影響に驚きました。とても恐ろしかったです。実際に平和村で暮らす子供たちに会って「もし自分だったら、自分の子どもだったら」と考えさせられました。夜のディスカッションで意見交換できたのはとても良かったです。みんなの考えを知って自分を見つめ直す機会になりました。その時々や環境によって自分の考え方は変わるとは思いますが、「実際にそうしてみないとわからない」で終わるのではなく普段から自分の意見を持つことが大切だと思いました。

カンボジアでは、人々の笑顔と温かさを感じました。倉田さんのアリとキリギリスの話はとても納得しました。お金があっても将来のために働き続けるアリのような日本人と、お金がなくても一日一日を楽しく生きるキリギリスのようなカンボジア人。だから、あんなに笑顔が素敵なんだと思いました。私も毎日を大切に楽しく、彼らに負けないように一生懸命頑張らないといけません。孤児院や日本語学校で出会った子供たちや学生はとても元気で、勉強に対する意欲が溢れていてとてもキラキラしていました。しかし、私たちが孤児院や学校で出会ったような学べる環境にいる学生たちはカンボジアにいる若者のうちのほんの一部で、ゴミ山や農村では学びたくても学べない子供たちが、観光地では物売りをしている子供たちがたくさんいたので少し複雑な気持ちでした。ネットやテレビで知識として知っていたし、文字や写真を見てかわいそうだと上から目線に思っていました。その現実を実際に自分の目で見ると怖かったです。

このスタディーツアーは想像以上にいろんなことを学びました。自分の視野を広げたくて参加しましたが、かなり広がったと思います。この広い世界で、自分がとても小さく感じました。その中で自分にできることを精一杯頑張りたいと思います。企画やスケジュール管理をするのは大変だったと思いますが、おかげさまで、たくさん考えて、たくさん学んで、たくさん笑って、たくさん楽しい思い出もできました。メンバーにもたくさん迷惑かけたし、たくさんお世話になりました。本当に感謝しています、ありがとうございました！

「今回のインターンシップで学んだこと」

法政大学・経営学部 4年

よく人はこんなことを言う。世界を見れば価値観が変わるよ。自分の中にある世界観の小ささに気づくよ、と。どうせそんなもの旅行会社が客寄せのために作ったキャッチコピーだ。今回の旅行ですら、常夏の国でのバカンス程度にしか思っていなかった私にはにわかには信じられなかった。でも実際に行ってみてそんな考えは意図もたやすく崩れさった。「百聞は一見に如かず」とはよく言ったものだ。聞いただけで決して感じなかっただろう。調べただけでは決して思わなかっただろう。その場所に行って、見て、そこに住まう人々と実際に触れあったからこそわかったことがある。今回の旅で私は、自分の甘さ、無力さを痛く感じた。そしてなにより、大きく価値観を揺さぶられた。

まず私は、自身の環境がいかに恵まれているかを再認識した(私は学んでいる学問の性質上、相対性を持って事物の理解を進めてしまうことがあるが、そこへの批判は今回御容赦願いたい)。平和村では、3階建ての塔の一番上のフロアで枯葉剤の被害に苦しむ子供たちが暮らしていた。子供たちは身体から脳まで、様々な部分に影響を受けていた。中でも脳性麻痺の子に私は強く心を揺さぶられた。彼はベッドに繋がれ、真っ白な天井を見つめ、時折思い出したように手足を動かす。彼は何を考えていたのだろうか。私には彼の気持ちを汲み取ることはできなかった。CCH 孤児院では、親に捨てられた子供たちがそこで暮らしていた。まだ幼く、親の愛情に飢えているはずの彼らは、それでも元気に、まぶしい笑顔で私たちを迎えてくれた。汗をかけばそれをタオルで優しくふき取り、遊び疲れれば丁寧に肩をマッサージしてくれた。痛みを知っているからこそ、彼らは人に優しくすることができるのだろう。また、彼らは一人ひとりが夢を持ち、十分とは言えない環境でも必死に日々努力していた。対して私自身はどうだろう。自由に体を動かすことが出来、やりたいことや、学びたいことを学ぶことが出来る。これはひょっとしたら彼らが望んでやまないものなのかもしれない。にもかかわらずその環境を十二分に生かすこともなく、夢もなくやりたいこともなく、ただのうのうと日々を生きている。これでは彼らに対して申し訳がない。変わらなければいけない。まだ何をすればいいのか具体的に掴みきれてはいないけれども、それでも今やれることを精一杯こなしていきたい、そう強く思う。

次に私は、自身の英語力のなさを痛感した。英語は今や世界で使われ、知っていることが当たり前になった。そんなのは当然の話だと思われるかもしれないが、日本で無為に大学生活を送っていた私には正直実感の湧かない話だった。そしてまさかベトナム、カンボジアで英語を多用するなどとは夢にも思っていなかった。だからなのか、なおさら現地の人たちが英語を使っていたのを見て、その重要性を改めて認識させられた。具体的には、ホテルや観光省で英語が使われたが、はっきり言って、ほとんど理解できなかった。これでは良くない。仮にもこれから社会に出て、世界をまたに働きたいと思っているのにこれでは夢のまた夢で終わってしまう。英語を学ばなければ、人生の中で今一番強くそう思っている。そのためにも今の自分の無力さをしっかりと受け止めてこれからの努力に生かしたい。昔先生が言っていた。英語を使うものとしてその入り口に立たと認められるのは「英検1級」からだよ、と。私もまずそこを目標として定め、手始めに「英検準1級」を取ろうと思う。

このように私の価値観は大きく変わった。与えられている環境は当たり前ではないし、むしろその環境に感謝しなくてはならない。その中で自分が志すもののためしっかりと努力しなくてはいけないのだ。それがもしかしたら私たちの義務なのかもしれない。そしていつかまた彼らと出会うことがあるならば、その時こそ誇れる自分でいたいと思う。

「ベトナム・カンボジアスタディツアーに参加して改めて感じたこと」

金沢工業大学 環境・建築学部 建築デザイン学科 2年

私は正直、高校3年生まで何になりたいかという夢もなく大学入試の時期を迎えた。しかし、国公立大学が不合格の時点で、来年への再挑戦に向けて浪人することを決意した。毎日の予備校に通うバスの中で、金沢駅のもてなしドームや21世紀美術館などの石川県の有名な建築を見るようになり、人に感銘を与えるようなデザインに興味をひかれた。それからだんだんと「あのような人に感銘を与えるような建物を設計したい。数々の建物の建設を手掛けた本学で建築デザインを学びたい。」と思うようになり、本学で学びたい気持ちが確信に変わった。そして迎えた2度目の入試では、待望の本学の建築デザイン学科に合格することができた。

私の10代は自分探しに必死で、高校を卒業してからようやく、自分の得意分野は英語と絵を描く等の鋭いデザイン感性であることを自覚できるようになった。大学を入学してからは、大学で建築デザインを専攻しながら、地元金沢にある建造物の伝統的な魅力の数々を英語を通して世界に発信したいと願うようになった。

昨年、私はニュージーランドで英語研修プログラムに参加した。出発日が近づいてきたある日、ホストファミリーの名簿とその家が描かれている地図が手渡された。地図を見た途端私はたとえようもない不安に襲われた。なぜなら私の家だけ他の13名と極端に離れたところにあつたのである。しかし、現地に着するや否やその意味がようやく分かった。他のみんなの家は、子供が自立して出ていった老夫婦だけの家やテレビや洗濯機さえもない貧しい家庭だった。ニュージーランドではホームステイを受け入れると、日本円にして約10万円支払われるということもあり、貧しい家庭が収入原とするということも少なくないということを知っていた。そのため、私は貧しい家に当たることが当然だと思っていた。しかし、私の家は一番街に近く、高級住宅街の一角にあつたのである。ホストファミリーは自分の設計事務所を持つ一級建築士で、ホストマザーは薬剤師というとても裕福で恵まれた家庭だったのである。街に出れば、ホームレス、飢餓や極度の貧困にあえいでいる人が少なくなかった。そのような人々を目の当たりにし、何もすることのできない自分の無力さを感じるばかりであった。

ニュージーランドで滞在することで、コミュニケーションの道具としての英語のもつ価値はもちろんのことデザインに関する新しい感性や貧困等の深刻なグローバル問題にも遭遇するなど、多くの学びの機会を得ることになった。これらの機会のおかげで、知識として知っていることとそれを活用し、実際に行動に移すことは全く別のものであることを認識することができた。

本学に戻ってきた私は、今世界的規模で、どのようなことが実際に起こっていて、どのような問題が生じているかを自分自身の眼で確かめるべく、今年の12月に本学で行われた「ラーニングエクスプレス」に参加した。「ラーニングエクスプレス」とは、東南アジアの農漁山村部において学生が問題発見・解決活動に取り組むグローバル人材育成プログラムのことである。学生は現地大学生およびシンガポール理工学院の学生たちと多国籍チームを組み、産業や観光の活性化、水質浄化、環境問題や持続可能な社会発展など、東南アジア農漁山村部に存在するさまざまな問題に対し、現地に滞在し、地域住民の立場になって考え、現地の技術・経済水準で実現可能な解決案およびプロトタイプを創出する。今回はシンガポールおよびインドネシアの大学生10名を招待し、本学の学生20名と多国籍チームを組み、インドネシア農村部における竹製家具製造工程を改善する工具の製作に取り組んだ。昨年9月に行われたプログラムでは、本学の学生がシンガポール、インドネシアの大学生とチームを組み、インドネシア・ジョクジャカルタ州の農村に滞在し、地区で作られている竹製家具

の製作過程の調査および改善活動に取り組んだ。この改善活動の過程で創出したアイデアを具体化するため、今回、パフォーミングスタジオに集い、10日間の活動において、ディスカッションを通じてアイデアを磨き上げたのち、夢考房を利用し、実際に利用可能な竹の加工工具を作成した。今後は、現地調達可能な材料で加工工具を製造するための検討を行い、3月のラーニングエクスプレスにおいて、私が現地への提供を図る予定である。

今後は、通訳案内士の資格を取得し、海外旅行者の人たちに建造物の世界的価値は勿論のこと、石川県の魅力を発信したいと思う。このプログラムを通して、自分にも社会に貢献できることがあると確信しつつ、学んできたことを自分のこれからの勉強と人生に活かし、社会で活躍したいと思っている多くの学生に伝えていきたい。

1年間浪人したおかげで、人間的にも成長できたと思っている。努力し最後までやり遂げることの大切さ、自分の生き方までも考え見つめなおすことができ、「浪人」という選択は間違っていなかったと思う。残された2年間、人生を変える最後のチャンスととらえて努力し続けようと思う。

「ベトナム・カンボジアで感じたこと」
立命館大学・法学部 2年

今回のツアーでカンボジアに10日間ほど滞在し、様々な分野の研修先を訪問し、お話を聞きました。そのなかには衝撃的でショックを受けた事柄もありました。例えば、カンボジアでは小学校を卒業する人間が半数に満たないという話やポル・ポト政権時代に多くの知識人が殺害され、医師が40人しか残らなかったという話などです。また、バスを降りると集まってくる物乞いや物を売る小さな子供たちの存在にもショックを受けました。一方で、カンボジアでは日本をはじめとする各国の援助で作られた学校や建物などをよく目にしましたし、今回のツアーでNGO団体も訪問したので、国際協力についても興味を持つきっかけとなりました。

今までカンボジアについてほとんど何も知らず、そもそも発展途上国に渡航したことがなかったため、今回のツアーに参加し、多くのことを見聞きしたことで、大変勉強になりました。

さらに、今回のツアーでは5回ほどディスカッションを行いました。孤児院を訪問した日には「日本ではなくわざわざカンボジアの孤児院に行く意義」というテーマで議論を行いました。そのときに「孤児院に行っただけでは子どもたちのためにはならない。結局は自己満足なのでは」という意見が出ました。自分があまり考えたこともなかった考えにはっとさせられました。他にも議論の中で「国際協力が本当の意味でカンボジアのためになっているのか」という話になった日もありました。同じ学生と1時間以上議論し、様々な意見が出るなかで、自分がいかに狭い視野のもとで生きてきたか、自分がいかに無知であるかということを感じさせられました。また、自分と同じ学生が実はそれぞれ様々な考えを持っており、いろんな価値観があるということを実感しました。カンボジアの日本語学校や職業訓練校を訪問した際には、現地の学生の食欲に学ぼうとする姿勢に驚くとともに、恵まれた環境にいるのに熱心に勉強しない自分を情けなく感じました。今回のツアーでは発展途上国について知るきっかけになり、また、自分の無知さを実感しました。今回の経験を糧に日本で精進していきたいです。

「ベトナム・カンボジアを通じて」
近畿大学・経済学部 3年

このツアーを通じて実際に現地に行ってみることの大切さを知りました。正直ツアーに行く前はベトナム・カンボジアについて深く知ることはありませんでした。そして不安もありましたが参加できてよかったと思っています。

中でも現地の子供たちや、学生がとても印象に残っています。幸せでない、可哀想だと思っていた孤児院の子供たちが全く印象が違って元気で人懐っこくたくさん笑顔を見せて言葉が通じなくて一緒に遊んだりできるのか心配だったのですが言葉が通じなくても子供たちと仲良くなれて心を開いてくれたことがとてもうれしかったです。

また現地の同い年くらいの学生の学ぶ意欲に圧倒されました。日本の文化について発表するとみんなが勢いよく手を挙げて質問してきたり、あいさつがとても元気がよかったり、私たちが当たり前のように学んでいてめんどくさいとすら感じるものが彼らにとっては学ぶことが楽しいんだろうなということがすごく伝わってきて自分もその気持ちをみならわなければいけないと思いました。それと同時に日本で当たり前のように小学生から学べること、ほかに交通や水道、ゴミの処理施設が当たり前のようにあることはすごく恵まれていることで、日本がそういった面で恵まれてるということはここに来る前から知っていたことでしたが、実際行って身をもって感じることは全く違うと思います。このツアーでそれを体感できてよかったです。またこのツアー参加者にも刺激を与えられました。聞く姿勢も受け身ではなく、ディスカッションでもみんなしっかりした自分の意見を持っていて自分と違う意見でも納得させられたりと、もっと自分も受け身ではいけない、もっと学ぶ姿勢が必要と感じました。

カンボジアは貧しくて支援の必要な点が多々ありますがそれで人々が不幸だとかは感じませんでした。農村と都市はすごく格差がありますが、その格差を埋められること、問題を解決できること、むずかしいとは思いますが一步一步いい方向に進んでほしいと思いました。悲しい歴史、問題があるカンボジアですが町の人々も笑顔でカンボジアの人々はすごく暖かくて親切、手を振れば笑顔で振りかえしてくれる。そんなところがとても好きになりました。

「発展途上国の「今」に触れて」

同志社大学・社会学部 4年

社会科の教科書やドキュメンタリー番組で他人事のようにしか見てこなかった世界、それが発展途上国である。電気・ガス・水道をはじめとしたライフラインがすべて整えられた環境で生まれ育った筆者にとって、発展途上国やそこで生活を営む人々の暮らしは想像し難い現実のひとつであった。これまで自分自身が向き合うことのなかった世界をまずこの目で見てみよう、そう思い立ったのがこのツアーへの参加動機である。ベトナムのホーチミン、カンボジアのプノンペンとシェムリアップ、2か国3地域での研修およびバス移動時の車窓から見た周辺地域の風景など目に映るもの、聞こえるもの、肌で感じるもの、すべてが刺激的で、物事に対する新たな見方や考え方を提示してくれるものであった。

ベトナムでの研修は主にベトナム戦争に関連する施設を訪問し知識を深め、戦争当時の状況理解や戦後から現在に至るまで枯葉剤の影響を受けている方や子どもたちとの交流から戦争が残した重い爪痕に触れることができた。「生まれてくる子どもが奇形児だと判明した場合、その子を産むかどうか」自分自身に当てはめて考えるきっかけを与えてくれたディスカッションを通して、同世代の参加者と意見交換し合うことで、よりベトナム戦争を身近に捉えることができた。

10日間にもおよぶカンボジアでの研修では、インフラ整備や教育格差をはじめ発展途上国が直面する諸問題のあらゆる側面を垣間見ることができた。貨幣経済の定着と共に海外資本の流入が激しく、目覚ましい発展を続けている首都プノンペンと、伝統的な生活様式のなかで自然と共存しながら自給自足の暮らしを続けている農村部とでは全くの別世界であるような印象を受け、想像以上の格差に唖然とした。今回のツアーを通して筆者がもっとも鮮明に痛感したのは、さまざまな「格差」である。先進国と途上国、都心部と農村部、富裕層と貧困層、教育を受けてきた人とそうでない人などその尺度は多岐にわたるが、それぞれの研修先で異なる社会階層の人に話を聞くなかで、これらの「格差」は歴史的・経済的・社会的・文化的要因などが複雑に関連し合い形成されていることを実感した。同時に、こうした現状を「格差」として認識しているのは当事者ではなく、我々のような第3者であるという事実も思い知らされた。農村部や孤児院で出会った貧しい子どもたち、ゴミ山で働き日々の生活の糧を得ている人々、彼らは先進国どころか首都であるプノンペンさえも知らず、自分が生きている地域以外のことは知るすべがない。したがって、生活水準を比較することができず、自分が貧しいのかどうかさえ分からない、それが現状である。「今日を無事に終えて、明日も無事に終わられるならそれでいい、今が楽しいならなおさらいい」現地の人々の暮らしを目の当たりにすると「幸せってなんなんだろう」という疑問が湧いてきた。先進国の援助によってインフラ整備を進め、国全体の物価指数やGDPを名目上あげることは容易である。しかしそれはKURATA ペッパーの倉田さんが指摘されたように資本主義の押し付けにすぎず「格差」の創造や露呈につながってしまう。そうなれば、これまで現状に満足していた人々が初めて「自分は不幸だったのか」と感じてしまうかもしれない。発展途上国が現在のままでいいとは思わないし、諸問題に対する解決策を模索していくことは、地球全体の環境問題や今後の発展を見据えたうえで大変重要である。ただし、先進国として何ができるのか、何をすべきなのか、今一度熟考し直す必要があると感じる。発展途上の人々の幸せか、優先順位を見誤らないように気をつけながら発展途上国との関わり方を探求していくべきである。

今回のスタディーツアーを通して実際に見たこと、聞いたこと、感じたこと、そして自分なりに理解したこと、これらの経験をこの先どう活かしていくのか、自分に何ができるのか、改めて考えるとやはりこれからの日本の将来を担っていくであろう子どもたちに、世界の現状をできる限りリアルに伝えていくことだと認識した。まだまだ経験は浅く、知識も不足しているが自分自身が学び続け、社会科の教員として日本の中高生に世界が抱える諸問題に目

を向けるきっかけを与えていくことが自分の使命だと感じている。

最後に、自己成長を促す機会を提供してくれた JAPF をはじめ、12 日間にもおよぶツアーを実りあるものにしてくれた 2 人の引率、それぞれの現地ガイドとドライバーの皆さん、各研修先でお世話になった方々、そして何よりも貴重な経験や数々の思い出を共有し、共に学び共に成長してきた 15 人の参加者、すべての「出会い」に感謝して本稿を終えたい。ありがとうございました。

「ツアーで知ったこと、気づいたこと、そして今後の自分について」
大阪府立大学・生命環境科学域・自然科学類 物理科学課程 3年

私は『発展途上国を知り、そして日本も知る』という目的で、今回のインターンシップに参加しました。この目的にした理由は、発展途上国、新興国の実際の様子を知り、イメージからの脱却をするため、そして『自分がこれからどう生きていくべきか?』という問いに答えを出すためです。この目的で参加して、私が感じたこと、気づいたことは、四つでした。

第一は、現地人と心を通わす難しさです。ごみ山で質問したときに、相手の考えを尋ねる質問に対して **Waste Picker** の人は答えてくれませんでした。また、私たちに背を向けたまま質問に答える人もいました。果たして、マスクをつけ突然現れた外国人たちに、彼らは心を開いて話すのだろうか、そのとき私は疑問に思いました。また、研修を振り返ると、今回見学した **CIESF** の教員育成事業でも、数か月間は現地教員と日本人教員の交流に時間を費やしていました。これらを踏まえると、異なる社会に生きる人たちと心を通わすことは簡単ではなく、むしろ非常に時間のかかることだということが分かりました。

第二は、機会の格差です。今回のツアーでは、都市で豊かな暮らしをする人や学生、ストリートチルドレン、農村の人、**Waste Picker** の人など様々な社会に生きる人に出会いましたが、社会ごとに教育、就労、情報入手の機会が全く違うと感じました。農村や社会的弱者に焦点を当てると、様々な機会が都市に比べ不足していると思います。例えば **Waste Picker** の中には簡単な計算すらできない人、夢をかなえる手段を知らない女の子がいました。後者の子は、勉強が面白くなくて学校は辞めたようでした。子供の **Waste Picker** は、学校を終えてからか、あるいは学校には行かずにごみを拾うようです。農村ではインフラの整備が整っていないようで、インターネットや携帯が使えるとは思えません。**Waste Picker** に対する差別もあるようで、就労にも影響するようです。一方、首都の人や、恵まれている子に注目すると、様々な機会が与えられていると思えます。プノンベンには、学校を中退した生徒たちに就労機会を与える **CIESF** や、日本語学校を教える **TAYAMA** のような学校がありました。驚いたことに、広報は口コミということです。プノンベンにいる人や、卒業生の親戚が入学する傾向にあると担当者は言っていました。私は6人の **TAYAMA** 学生と知り合いましたが、半分がダブルスクールでした。彼らの9割が携帯を持っていて、日本に帰ってから毎日 **Facebook** が盛り上がっています。デパートや、またこれは一部の子ですが外国に行ったことのある人もいます。私は、カンボジアの格差が努力の結果では片付かない格差だと思います。カンボジアは、生まれたときから人生の機会が決められてしまう国なのかもしれません。この格差は縮める必要があると今回気づかされました。

そして第三は、社会というものの重要性です。前述したような格差の現状を見ると、カンボジア国内には、日本では考えられない格差が存在していると思います。そして、日本社会とカンボジア社会とで比較すると、両国間には格差の面以外でも大きな違いがあると思います。私はダブルスクールの学生に「地球温暖化」について、噛み砕いて伝えましたが理解できていないようでした。「CO2」ですら理解してもらえませんでした。日本では小学生でも知っている地球規模の問題を、学歴の上位の人ですら知らないことに、私は違和感を覚えました。また、**TAYAMA** の学生に「カンボジアはどういう国?」と聞くと、「格差の面では正直悪い国だと思うが、こういう話はしたくない。自分の身が危険になるから。」と答えてきました。さらに、私は今回とてもきれいな病院で診察を受ける機会がありました。その時に、現地の人も私立病院で治療をするときは、費用を全額負担するのだと知りました。カンボジアには日本でいう国民保険がないからです。正直私は、自分の国について意見を言うことや、困ったらいい病院を選んでいける日本での生活は、当たり前の暮らしだと思っていました。ただそれは、私が社会—日本社会—に守られているだけかも知れません。権利は社会が変われば保障されない危ういものかも知れません。このようなことから、社会は人にとって重要なものなのだと気づかされました。

第四は、人生における家族の重要性です。前述した様々な社会に生きる人たちに、働く理由を尋ねるとその多くが「家族のため」と答えていました。カンボジアやベトナムは、家族で支えあっていく文化があるようです。今回会ったどんな社会に生きている人も、家族を大切にしていました。一方、経済的に豊かになったが、核家族化が進行した日本に帰ってみると「孤独死」、「介護疲れ」、「虐待」等の言葉が NEWS で多く取り上げられることに気づきました。私も今までを振り返ると、ここまで学校に通わせてくれたのが親のおかげだと、意識はしていませんでした。生き方を考える中で、「家族」というものが大切であると思ひ出させてくれました。家族とのつながりの面において、日本はカンボジアを見習う必要があるようです。

今回のツアーを通じて、途上国の機会の格差の問題や、よい社会を築くことの必要性を強く感じました。そして少しですが、途上国のイメージからの脱却ができたかと思えます。今回のツアーの経験を基に、これからは『自分は社会にどう関わるのか?』、『そのために何を学ぶべきか?』という問いに答えていきたいと思ひます。

「12日間を通して感じたこと」

神戸市外国語大学・中国学科1年

私がこのツアーを通して一番印象に残っているのは、現地の人々の純粋な笑顔と素直な心です。出発前にカンボジアについて調べてみると、治安が悪いという情報が多く、周りの人たちにも気を付けるようにとたくさん言われました。不安を感じながら参加したのですが、実際にツアーを終えてみると、気さくで親切な人ばかりでした。みんな明るくて、心に余裕のある生活をしているという印象を受けました。幸せはお金のあるなしとは関係ないということを実感した旅でした。特に孤児院の子どもたちや日本語学校の生徒たちは生き生きとしていて、いつもとびっきりの笑顔を見せてくれました。笑顔の裏には多くの苦悩や困難を抱えているかもしれないけれど、今を楽しんで生きている感じが伝わってきて、エネルギーをたくさんもらいました。私も今この瞬間を大切にしながら、毎日を楽しんで過ごそうと思いました。

また、自分がすごく恵まれている環境で生きてきたのだと感じさせられました。当たり前のように学校に行き、お金の心配もせず整えられた環境にいる自分は幸せ者だと改めて実感しました。19歳の春にこのことに気づかせてもらえたのはとても有難いことで、今感じているこの気持ちを忘れずに日々一生懸命過ごしていきたいです。

そして、この旅は自分自身の知識の乏しさ、視野狭さにも気づかされた旅になりました。毎日の研修はもちろんのこと、特に毎回のディスカッション、振り返りでは、自分では思いつかないたくさんの視点、見方をみんなと共有することができ、多くの気づきと学びを得ました。参加メンバーみんなの知識の豊富さ、自主的に学ぼうとする姿勢に刺激を受ける毎日でした。

この研修は日々が新しい発見の連続で、私の人生の中で最も濃密な12日間になりました。学んだこと、感じたことを自分の中でしっかりと消化し、さらに知識を深めていきたいです。たくさんの出会い、学び、刺激を下さり本当にありがとうございました。

「価値観による考えの違い」

京都女子大学・現代社会学部 1年

私がこのスタディツアーに参加した理由は、以前から発展途上国の社会情勢や生活に興味を持っており、行ってみたいと思っていたこと。これまでの大学生活での勉学に対する態度を見直し、新たな心持ちで勉学に挑めるようになりたいという思いがあり、ベトナムとカンボジアでのツアーの研修内容がそれを可能にしてくれると考えたからである。

ベトナムでのツアーは驚きの連続であった。ベトナム戦争がもたらした悲劇、そして戦争当時の貴重な体験をし、教科書で学んできた上辺の歴史とは全く違う色鮮やかなものを目の当たりにし、ベトナムが戦争に未だに苦しめられている現実を突きつけられた。

カンボジアでは、信号もない、国境付近の電柱はとても細い木の棒、電車もバスも、高速もないというインフラの不整備さに驚きつつも、ツアー内容的には、日本での生活と比べることが多く、それについて考えることが多かったように思える。資本主義経済の中で育ってきた私たち日本人にとって、お金はとても大事なものである。そして私たちはそれを得るために日々生懸命働き、得たお金で物を買うことで自分の満足度、幸福度に繋がり、お金を貯めることで未来への安心感を得ているといえる。しかし、「カンボジアの人々はお金がなくても楽しく生きることができればそれでいいという考えを持っている。資本主義は本当に必要なのだろうか？」という話を聞き、感銘を受けた。私はそのような考え方や疑問を持ったことは一度もなかったからだ。そして世の中お金が全てでないという考えでその生活が成り立っている国が現代には未だあるということに気付かされ、また、そういう国があってもいいのではないかと思った。お金を最大の価値として資本主義経済に追われて鬱病になり、自殺率が右肩上がりになっていく社会よりも、楽しく暮らすことに価値を置く社会の中で暮らす方が幸せであるのではないかと思えることができた。そして、グローバルという言葉が良いイメージで飛び合っている現代だが、世界を全てグローバル化させるということは、先に記述したような社会を世界から失くしてしまう危険性があるので、グローバル化することはいいことばかりではないなとも思えるようになった。このような価値観を得たことは私にとって、とても大きな前進である。

また、カンボジアの日本語学校などを訪問し、そこで学ぶ生徒たちの勉学への熱心さに、自分がとても情けなく思えた。カンボジアの教育制度的な面にはまだまだ課題がたくさんあることを知ったが、彼らの学ぶ意欲とその課題に立ち向かう人々によって、何年かかるかは誰にも分からないことだが、きっと解決に向かうであろう。こういった教育面の改善によるカンボジアへの影響がどのように反映されていくかがとても楽しみでもある。

このツアーで得た価値観や経験をこれからの自分に活かしていきたい。この春からは心機一転して勉学に励むことができそうである。

「ベトナム・カンボジアスタディツアーで得たこと」
同志社大学・経済学部・経済学科 2年

私はこのインターンで多くのことを学ばせて頂き、自分が参加前とは一回り大きく成長したことを実感しています。その要因は数多くの思い出と共に考えられますが、このインターンでは一般の旅行では訪れることができない場所に訪問をさせて頂くことができました。それら全てここに記す価値があるものでしたが、私はその中でも現地の子ども達や学生と触れ合った孤児院と日本語学校が自分に新たな影響を与えてくれたと感じています。

彼らは日本人の同年の学生とは全く違う目をしていました。発展途上国であるカンボジア・ベトナムは日本とは大きく差がある教育環境に置かれており、ハード面ソフト面共に充実しておらず、先進国のような環境に至るまでには何十年かかるか分かりません。日本を出国前、発展途上国の教育環境が悪いことは容易に想像できましたが、百聞は一見に如かず、言葉を失うほどの環境でした。しかし彼らはその限られた、先進国と比べると圧倒的に劣った環境にありながら必死で目の前の国に種類しかない教科書に嚙り付いて新たなことを学び取ろうとしていました。私はその光景を見て、感動と共に自分の日常を振り返りどこか情けない感情を覚えています。私は大学在学中にサークルや机で学ぶ勉強に追われ4年間を過ごすことを嫌い、自分の足で自分の目で一生のうち今しかできないことを人より多く経験し、他の同年代に差をつけようと生きてきました。その目的は就職に勝つことです。私は大学に入学して周囲を見渡したときに、彼らに負けたくはないと思ひ様々なことを就職に勝つために経験してきたつもりでした。しかし、現地で彼らを見たとき私はそのような考えは小さく、稚拙な考えなのだと感じました。彼らは私のように、先進国の多くの人間のように未来や将来のことを考えて生きていません。彼らは未来を考える力があるならそれを、今を精一杯生きるために注ぎます。私はそのような彼らの生きる姿勢に心打たれました。

今の時代日本は少しずつではありますが景気が上向きになり、それに引っ張られるように就職氷河期と呼ばれた時期も雪解けの気配が伺えます。しかし、未だ私にとって就職は人生において大きな「壁」です。今後も勝つために努力を重ねる必要があると思っています。しかしその過程において私は、努力を重ねよじ登るための「壁」を、新たなことを経験しようとする際に、「壁」を盾とし利用していることに気付かされました。何においても就職にどのように役立てられるかを考え、それが考え付かないものは切り捨ててきました。しかし、それは間違っていることに気付きました。なぜなら、見る角度が限定的なものになり物事が歪んで見えてしまうからです。この先は、就職のためのみではなく、自らの人間としての体積を増やすためにより多くの経験をしていきたいと思い直しました。「壁」越しではなく、違う角度から違う景色を見ようと思います。

この度は貴重な機会を私に与えてくれた全ての関係者の皆様に感謝申し上げます。

「JAPF インターンシップスタディツアーを終えて」

京都女子大学 現代社会学部 1年

今回、ベトナム・カンボジアインターンシップに参加してたくさんのことを学びました。初めて発展途上国といわれる国に行き、その国の現状を自分の目で見て、たくさんの方の話聞くことで今まで自分が全く知らなかった問題、考えたことのなかった問題に直面し、物事の深刻さを実感しました。毎日たくさんの方の刺激を受け、夜には研修メンバーとのディスカッションでもっと深く掘り下げることができ、意見を共有することでまた自分の成長に繋がったのではないかと感じました。

私が一番考えさせられた問題は、カンボジアの教育に関してのものでした。数多くの団体が「学校を建設する」という支援を行っているが、必要なのは「良い校舎ではなく良い授業」「質の高い授業・中身」であると、過去に考えてきた支援方法とは異なった方法を知ることができました。物資を与える、校舎を建設するというその場だけの支援では自立させることが不可能で「問題解決」が必要。と、教育水準・知識レベルが非常に低いという問題をまず解決していかななくてはならないことを目の当たりにしました。実際にカンボジアの学生と会い、彼らの学びに対する姿勢から自分が学ばなければならないと強く感じ、あまりにも恵まれすぎているといえる日本の学習環境でこれからどのように学んでいくのかも考えさせられました。

12日間の研修で感じたこと、学んだことをできるだけ周りに伝えたい。現状を多くの人に知ってほしい。自分に必要だったことを沢山学ぶことができ、実りのある研修でした。実際に足を運び、日本では経験することのできなかつたことを経験することができたことで、様々な角度から物事を見つめることも可能になったと思います。この研修に参加して本当に良かったです。現地での感情を忘れず、今回の経験を今後どう生かすことができるか考え、行動していきたいです。

「ベトナム・カンボジアスタディツアーで学んだこと」

岩手大学・人文社会科学部 2年

このスタディツアーに参加するにあたり、途上国を訪れる意義について考えていた。なぜカンボジアに行くのか、実際に訪れるまでは結局のところ分らなかった。しかし、先進国の社会制度や経済発展の裏には、搾取される周辺国の実情があり、日々変化していく国際情勢により埋もれていく過去の闇は決して過去ではなく、未だ爪痕が深く残っていることなど、先進国に生きる身として決して忘れてはならない多くの問題について学ぶことができた。

これまでカンボジアに対して、貧しい国というイメージをもっていたが、カンボジアは貧しい国などではなく、むしろとても豊かな国だということがわかった。一年を通して食料に恵まれ、気候とうまく付き合う為に一日中あくせくと動くことはせず、ゆったりと一日一日を大切に過ごす人々の生き方が、資本主義による貨幣経済や外資系企業の進出によって崩壊していくことは非常に惜しい。「資本主義こそが進歩」という考え方が当たり前のように唱えられるが、実際にカンボジアのスピード感にふれることで、もっと大切にすべきものがあることを教えられた。

また、ベトナム、カンボジアの二か国を通して最も考えさせられたことは、歴史の爪痕の深さである。ベトナム戦争やカンボジア内戦が、「ミサイルが爆発して終わり」という戦争では無く、DDT、地雷、不発弾など、遺伝子にまで残るような戦争であることを学んだ。現地で暮らす人々にとって、未だ戦争は終わっていない。爆弾や障がいと戦い続けている人々がいる。さらに、ポル・ポト政権による虐殺の歴史はあまりにも凄惨であり、キリングフィールドは生々しい残酷さをもって我々に訴えかけてくる。現地の人々の間では未だに語られにくい歴史であることから、過去の歴史と向き合うこと自体にまだ多くの時間を要することが察された。このような二か国の戦争の歴史について、リアリティをもって学んだことで、そのおそろしさと根深さを非常に強く実感することができた。

その他にも、ごみ処理や教育、貧富の差など、多くの深刻な社会的問題が見えた。それらは日本ではあまり考えられないような問題であるが、だからといって知らなくてよい問題ではない。環境問題や経済格差など、今世界を揺るがしている問題に大きく関わっているからである。今回のスタディツアーを通して、先進国ではなくベトナム・カンボジアを選んだことにはやはり大きな意義があったと感じている。先進国には聞くことのできない人々の声を聞き、立ち止まって見つめなおすことができた。世界には様々な立場があり、できる限りすべての視点から世界を見つめなおすことが必要とされていることを強く感じた。

「ベトナム・カンボジアスタディツアーを通して」
明治学院大学・社会学部 2年

「幸せとは何か」という一見大それたものだが、いつの間にか忘れていたものを改めて考えさせてくれた非常に濃厚な二週間だった。大学の講義で発展途上国に興味を抱いた私は、一度自分の目で現実を確かめてみたいと思い、このツアーに参加した。ツアーは毎日が刺激的で、自分が予想していたことを上回るほどの体験が多くあった。

最初に訪れた戦争証跡博物館で目にしたベトナム戦争の数々の爪痕は忘れられない。特に、アメリカ軍が使用した枯葉剤の影響を受けた人々の写真は衝撃的で正直、目をふさぎたくなるほどであった。平和村にいる子供たちはみんな元気で笑顔で我々のところに駆け寄ってくれた。子供たちの元気に圧倒された。しかし、知的な障害を持ち、ほぼ植物状態の赤ちゃんがいる部屋に入った時、思わず体がくすんでしまった。赤ちゃんを目の前にして、枯葉剤の恐ろしさを改めて実感し、二度とこのような兵器が使用されてはいけなく強く感じ、また、この現状をたくさんの方がもっと知るべきだと感じた。アメリカの支援がないと聞いて驚いたが、日本の原爆もこれと同じなのかもしれない。

カンボジアでは教育支援の大切さを感じた。教育はカンボジアのさまざまな社会問題の根本的な解決策であると考えている。ゴミ山の問題が特にそうであるように、クメールルージュにより多くの知識人がいない中、教育を改善し、カンボジア人が自らの手で自国を改善、改革していく必要があると思う。そのサポートを海外の人々が担い、援助する必要があると思う。カンボジア人は皆、勤勉であり皆、目標を持っていた。皆、目標に向かって頑張っていた。そんな姿を見て、自分が情けなくなったり、恥ずかしい思いをして、自分自身を見直せる良い機会ともなった。このようなカンボジア人の人間性を生かした教育支援をシーセフ以外にも様々な組織に広がればと感じた。

自分が、日本に生まれて 20 年間、いかに整った環境で、いかに教育を受けてきたか。自分は本当に恵まれていると感じた。自分の周りの環境、両親、家族に今まで気づきにくかった幸せを改めて感じた。

今回のツアーで感じた様々なことをただ感じた「自己満足」にならないように、しっかり自分のものにして、今後どう生かすか考え、実行していきたいと思う。

「先進国と発展途上国の互惠関係」

慶應義塾大学・文学部・人文社会学科 2年

カンボジアの近年の経済発展は目覚ましいものがある。過去 10 年の GDP 成長率が 7.95%と ASEAN 加盟 10 ヶ国中第一位であり、ASEAN の議長国も務めている。首都プノンペンでは高層ビルの建設が進むにつれて地価は急激に上昇し、高級外車が走り回っている。もはやカンボジアは虐殺、内戦、地雷といった負のイメージだけの最貧国ではない。数多くの外資系企業が参入し、今後もますますの発展が見込まれている。しかし、カンボジアを訪れて、私は余りにもカンボジア国内で格差が拡大していることに驚いた。国連世界食糧計画 (WFP) の調査によると、カンボジア人口の 35%が 1 日 1 ドル以下で生活する貧困層である。貧困層の人々の大半は、農村部に住んでいる。都会の人々は、所得が有るので子供は高い水準の教育を受け、大学に行き、待遇の良い職に就いて、ある程度の所得を得ることが出来る。それに対して、地方の人々は学校に行くお金が無いので、満足な教育を受けることができず、所得が高い職に就くことが出来ない。ユネスコの世界教育に関する報告書「グローバルモニタリングレポート」によると、カンボジアでは小学校の留年率が非常に高く、24%だった。また幼児の保育および教育の普及率が東南アジアで最も低く、就学前に教育施設に通う 3～5 歳児はそれぞれわずかに 9%だった。このように教育格差が存在することに

よって、負の連鎖がうまれ地方と都会の格差は広がって行く一方なのである。格差をすべてなくすことはできない。もし格差をなくそうとすれば、それはポルポト政権の再来になりかねない。とはいえ、最低限度の生活水準の保障は必要だ。カンボジアの QOL の全体的な底上げのために、先進諸国民である我々にはいったい何ができるのか、考えなければならない。JICA はこれまでも無償で様々な支援をカンボジアに対して行ってきた。

もちろん、現段階においては JICA のように先進諸国が発展途上国を支援するという体制は必要だ。しかし、いつまでもそのままではいけない。発展途上国が完全に一つの国家として自立して存続していくためには、他国の支援に甘んじるだけではなく、発展途上国自らが国内の様々な面における改善に取り組まなければならない。現にカンボジア国内には「カンボジアは支援されて当たり前」といった風潮があるという。政府もあえてゴミ山を放任し、スカベンジャーの子供達を支援国側に対するパフォーマンスのように扱っている節があるという。カンボジアはじめ発展途上諸国が本当の意味で今後発展していくためには、受動的にただ援助されるだけではなく、対等な国家として先進諸国と発展途上国が互惠関係を築くことが重要だと思う。

「JAPF 春季長期インターンシップに参加して」
東京学芸大学・教育学部 3年

私はこのインターンシップを観光に行くような気軽な気持ちで参加しました。そのような気持ちで始まったインターンシップでしたが、訪問するところ1つに1つに考えさせられるものがありました。

私がこのインターンシップを通して、立ち止まって考えることが特に大切だと思いました。これまで発展途上国は、先進国にあこがれ、先進国のようになりたいと考え、先進国と同じような制度を導入するという支援が求めていると考えていたからです。この支援について、1歩立ち止まって、今行われている支援の弊害で苦しんでいる人もいるように思えました。先進国の支援によって、貧富の差が拡大したり、街の発展によってゴミが増え、ゴミ山の量が増えてしまったり、これまでののびのびとしたスローライフがなくなってしまったり、、、一概に今行われている支援がベストだと言えないように思えました。

同じように1歩引いて考えてみると。孤児院やゴミ山を見せ物にしていることについても考えさせられました。孤児院での研修は、子どもたちも可愛くて、笑顔で駆け寄ってきてくれて、言語の壁を感じさせないほど楽しかったです。でも、この孤児院での研修を「楽しい」だけで終わらせてしまったら、子どもたちを見せ物になるのだと思います。「楽しい」という印象が強いからこそ、ツアーの内容に孤児院でのボランティアという内容を入れて売り込む会社もあります。子どもたちの目線に立って考えてみると、孤児院には私たちのような一時的な訪問者がたくさんいて、その度に嬉しい出会いと悲しい別れを経験することになります。私たちが訪問することで、他国の存在、他国の文化について自国内で知ることができるというメリットもありますが、子どもにとって本当に私たちのような訪問がベストなのか考えなおす必要があるのかなと思いました。

ゴミ山での研修も印象深いものでした。ゴミの臭さや量にも驚きましたが、そこでゴミを拾って、家計を立てている人がいること衝撃的でした。現状として、ゴミ山のおかげで生活が成り立っている人もいて、ゴミ山の存在をどうすべきか考えさせられました。政府はそんなゴミ山の存在を知っていて、ゴミ山をなくそうと言っている一方で、ゴミ山の衝撃的な写真を利用して他国からの支援を求めていると聞きました。国民の生活を守るべき存在である政府は何をしているのだろうと思いました。

カンボジアにはいくつかの問題が山積みになっていて、その問題に対する支援もたくさん行われています。でもその支援のなかには、メリット・デメリットがあります。何の支援が最重要で、その支援のメリット・デメリットを踏まえて支援を求めるかどうか考える必要があると思いました。

最後になりましたが、いろいろ企画していただき、ありがとうございました。とても充実した12日間でした。そしてこれからも仲良くしていきたいと思えるような仲間に出会うことができ本当によかったです。ありがとうございました。

「開発」について見直す

東京外国語大学大学院・総合国際学研究所 1年

12日間のベトナム・カンボジアスタディツアーを通して、貴重な経験が得られた。特に、国際開発について、普段テキストで書かれた知識をしか知らなかった私は、現地に訪問しに行き、現地の状況を自分の目で見て、新たな認識が得られた。本稿では、カンボジアを中心に、現地状況、国際開発における援助側および支援のやり方などについて見直したいと思っている。

まず、現地の状況について述べたい。一つ目は、海外企業や支援団体の進出によって、現地住民のライフスタイルが変わっている。具体的には、衣食住が西洋化していくほか、米ドルが流行しており、外国語の勉強が流行っている。そして、カンボジアでは、もともと弱点である教育や医学が今発展しており、日本語学校および農村の中学校のインタビューによって、教師や医者になりたい学生が増えていることがわかった。その一方、「カンボジア＝貧困」というイメージを変えてきた。確かに、カンボジアの経済力はまだ低いレベルであり、インフラ設備も不十分であるが、もう一つの面から見れば、現地住民の明るい性格、豊かな自然資源、世界に名だたるアンコール遺産群などがカンボジアの独特な宝物だと言えるだろう。しかし、このような貴重な資源をいかに活用するか今後の課題になると思われる。また、近年、海外からの協力援助が盛んになり、経済成長に貢献する一方、環境汚染、道路渋滞、貧富格差、農村発展緩慢など、開発からもらった問題も深刻化してきた。続いて、開発の援助側と開発のやり方について具体的に説明したいと思われる。

次に、援助側について、主に二つの点がある。一つは NGO と一部の日系企業が融資困難。日本人によって起業された KURATA ペッパーおよび養育支援団体の CISEF 事務所で見学したとき、現段階で最も問題になるのは資金不足だと言われた。そして、それらの団体や企業は共にカンボジア政府から少量の資金支援がもらえるが、日本政府からの支援がないことがわかった。さらに、JICA や政府による支援はいつも理系の教育支援団体に傾くと、CISEF のスタッフがそう言った。もう一つは、日本はベトナムおよびカンボジアの最大支援国とのことを実感した。外務省のデータによると、2008年から2012年まで、日本の対ベトナムの経済協力実績は合計 23361.04 億円であり（うち、円借款 20794.90 億円、無償資金協力 1407.55 億円、技術協力 1158.59 億円）¹、対カンボジアの経済協力実績は合計 2724.55 億円である（うち、円借款 427.21 億円、無償資金協力 1623.66 億円、技術協力 673.68 億円）²。そのような経済協力の成果はベトナムとカンボジアに行ったとき実感した。特に、カンボジアでは、日本語学校、日本による支援されたフェアトレードおよびレストラン、日本人が設立した NGO などがよく見られた。もちろん、言うまでもなく、日本製の車も一番人気のものである。また、支援だけでなく、日系企業の進出や日本人の観光客も年々増えている。それによって、現地の経済成長に貢献する一方、現地住民自身にも影響を与えている（たとえば、日本語勉強が人気、マーケットの商売人も日本語がしゃべれる）。

最後、支援のやり方について見直そう。様々な支援団体に対するインタビューを通して、支援のやり方の問題点を気づいた。まずは、国際協力が深めるにしたがって、日本のみならず、中国、韓国、アメリカなど大量な海外企業がカンボジアに進出するようになった。そもそも海外企業の進出は現地住民の雇用、経済成長などに有利ではあるはずだが、利益を求めるといふ企業の本質によって、現地の需要に合わない商品の投入、環境汚染、貧富格差の拡大などポスト植民地化の傾向も著しくなってきた。そして、周縁化された現地住民の現状を変えにくいことも問題点である。プノンペンの中心部に行ったとき、王宮の広場、高級ホテル、

¹ ベトナム http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/shiryo/kuni/13_databook/pdfs/01-07.pdf

² カンボジア http://www.mofa.go.jp/mofaj/gaiko/oda/shiryo/kuni/13_databook/pdfs/01-02.pdf

メコン川沿岸で並んだ各国の国旗に対して、薬を飲むだけで、ハエが飛んでいる粗末な病室で命を天に任せる女性患者、学校を辞めて、ゴミ山でゴミを拾って生きている女子学生、物乞いあるいは客引きの子供たちの様子も見つけた。それらの貧しい人々にとって、豊かな開発成果は手に届かない遥かな存在のようだ。しかし、政府による開発支援はいつも目に見えるところに投資し、政府にとって、その貧しくて周縁化された人々や地域に投資しても、短時間で著しい成果が出せず、結局むしろ損する恐れもあるゆえ、周縁化された現地住民を無視するままにした。それによって、周縁化された人々に対する支援は政府だけでは足りず、NGO、特に現地の民間団体からの支援が必要だと思われる。しかし、ローカル NGO は発展したばかりの段階で、資金欠乏や人材不足などの問題点も存在しており、今必要なのは日本などの先進国の NGO、専門家とのパートナーシップを築くことだと思われる。

要するに、ベトナムとカンボジアは思ったより発展している。しかし、開発については、いろいろな問題点が存在している。まず、日本を代表とする支援側から見れば、大量の支援団体と企業が進出する一方、政府からの保障がまだ足りないと思われる。また、開発のやり方については、海外企業の価値観の、弱者に対する支援、現地 NGO の発展は今後の課題になる。そして、以上の問題点によって、三つ提案がある。一つ目は、日本政府は海外進出の中小企業に支援すること。二つ目は、先進国 NGO とローカル NGO のパートナーシップを築くこと。三つ目は援助のやり方は経済開発から人間安全保障へ転換することである。ベトナムとカンボジアの平均年齢は非常に若いと言われ、現在では、強い生命力を湧いてくると感じており、今後の発展および先進国との協力を期待している。

追記：振り返ってみれば、12日間の研修は充実に過ぎました。今回のインターンシップのおかげで、政府、NGO、海外企業など様々な援助団体と出会え、開発現場で見たり、感じたりして、いろいろな立場から現場の状況についての理解も深めました。もちろん、現場で見るだけでは不十分であり、後ろに隠された実情も見られないですが、私にとって、今回の体験は国際協力の現場への第一歩のようで、これからもっと現場で体験する必要があると痛感しました。また、現地の経験だけでなく、日本についてもいろいろ勉強になりました。皆さんと一緒に過ごした時間が本当に楽しいでした。ここで、心より感謝申し上げます。

「インターンシップとこれから」

同志社大学・経済学部・経済学科 4年

今回参加した8日間のカンボジア・インターンシップでは、非常に多くの収穫がありました。私はインターンを通じて、普段生活する環境と異なる場所で、自分を試し・磨きたいと思い、参加しました。しかし学べたことは国や文化に関わる知識だけでなく、これからの自身の人生において活かしていくことのできるものであったと感じています。

私はインターンで、とても強く感じたことが3つあります。1つ目は、価値観の違いを認めて共存しあうことです。KURATA ペッパーを経営する倉田浩伸さんがカンボジア人と日本人の生きるリズムの違いを説明して下さったときに、自分自身の価値観からものを考えるだけでなく、相手の立場(価値観)に立って物事を考える重要性を一層つよく感じました。その結果、HIV 病棟やゴミ山視察時の当事者の方たちとの面会では、自分のしたいことと相手の立場の望むことの両側面から考えて行動に移せたと思っています。また、毎晩行われたディスカッションでは、他のメンバーの違う価値観同士の意見を尊重しあって進めていくことをできました。

2つ目は、生き活きと輝いて努力することの大切さです。日本語学校と農村でのフリースクールでとても生徒たちが目を輝かせて勉強していたのが印象的でした。特に日本語学校では、日本の学生ではあまり見られないほどの笑顔で楽しそうに学生生活を過ごしていました。彼らは、自分と家族の生活をかけて勉強していると笑顔で質問に答えていました。勉強以外の場合でも彼らのような意識や情熱を持って臨む姿勢は、私を含め日本の学生の大半が参考にしていきたいものであると考えます。

3つ目は、参加メンバーの人柄の良さと協力していくことの大切さです。私をはじめ多くのメンバーが初対面同士だったので、良い人間関係をインターン中に作ることが目標になっていたと思います。その中で、お互いがディスカッションなどで本音の意見を出し合うことで仲が親密になっていったと感じています。それによって、体力的に精神的に負担となるような研修場所であっても助け合い、手を抜くことなく学ぼうとできました。今回のインターンで、仲間との友好関係を深めることが、個人的にも団体的にも良いことを再認識しました。

以上のように、私はカンボジアでの生活と研修を通じて、多様な価値観のもとで深く考えること、生き活きと物事に取り組むこと、仲間との関係を大事に過ごしていくことの3点が重要だと感じました。カンボジアの人々は、日本に生活する人にとっては普段と異なる環境で驚きの連続です。しかし、そこで学んだことはこれからの人生にとっても、糧となっていくだろうと思うので春からの社会人生活も悔いなく過ごしていきます。このように自分を奮い立たせてくれたカンボジア・JAPFのスタッフの方々に感謝したいと思います。

「カンボジアで感じたこと」
同志社大学・経済学部 2年

カンボジアで感じたことは偏見や自分の価値観で物事を判断せず、客観的に物事を見る難しさと人々の目の輝きがあるということである。

初日にカンボジアをバスで観光していたとき、人々の生活を見ながらこう思っていた。日本よりはるかに生活水準が低い。ここに住んでいる人々は快適と思って生活しているのだろうか、と。この思いは完璧な上から目線で、しかも日本人の主観が入ったものだった。このことを最初の研修先であるクラタペッパーで打ち明けると次のように指摘された。「風土と人々の生活は切ってもきれないもの。日本人が良かれと思ってやったことが、カンボジア人には迷惑なこともある。その国の人々がなぜこのような生活をしているのか考えるのが重要だ」と。カンボジア人にとってはこのような生活が一番暮らしやすいのかもしれないと思い、また、これからの研修ではできるだけ日本人の主観で物事を見ずに客観的にカンボジア人の生活やカンボジアという国を見ることは意識的にしないとできないことだなど、その難しさを感じた。

カンボジアの人の目は輝いている。それは純粹であるということ。このことが一番感じ取ることが出来たのはタヤマ日本語学校を訪れたときであった。僕らが教室に入った瞬間に大きな拍手で迎えられ、大きく元気な声で挨拶をしてくれた。僕らが教壇に立って日本の文化や遊びなどを発表しているときも一生懸命に聞いてくれた。異国の文化や言語を学びたいという気持ちが日本人よりも強いかもしれない。何でそのような気持ちが強いと感じたのかというと、日本語を活かす仕事に就きたいと考えている学生が多く、また、3か月しか日本語を勉強していない学生でも僕らとコミュニケーションをとることが出来ていたことが分かったからである。人は学びたいという純粹な気持ちで学ぶ姿勢が、目を輝かせている大きな理由だと実感した。7年以上英語を勉強しているのに簡単な英語も話すことが出来ない日本人は見習うべき姿勢だと思う。

上記以外にも HIV 病棟、地雷博物館、CHESF など訪れて様々な話を伺ったり、現状をみたり、様々なことを経験したが、これらの経験やカンボジアの現状をほかの人にありのまま話し、知ってもらうことが一番手軽でカンボジア人との誤解を生みだしにくいボランティア活動だと思う。そのことを知ってもらった上でどのように行動するのかはその人次第であり、もしかしたら募金やNPO 法人に参加する人もいるかもしれない。そのように具体的な行動に移してくれるのは構わないが、重要なことはカンボジアという国を勉強した上でそのような行動に移すことだと思う。客観的にカンボジアという国を判断し、何が課題で、どのような援助をしていくことがカンボジアにとって有益なのかということを考えて行動する人が多くなればもっと良くなるだろう。そうすれば、必然的に輝いた目を持つ人は今よりもっと増える。僕はその土台の種まきに関わりたいと思う。

「カンボジアを訪れて考えたこと」

兵庫県立大学・環境人間学部 1年

カンボジアはどんな国なのか、実際に訪れるとその印象は大きく変化しました。トイレの方法、水の処理方法、ゴミの処理など多くのことが違って、ツアー中は常に衛生面に注意を払っておかなければいけません。日本に帰ってからも、お腹を崩し、生まれて初めて蕁麻疹を発症して、日本の整った環境に初めて感謝したと同時に、カンボジアの衛生面に対して改めて考えさせられました。

ツアーの中で、子どもたちへの教育支援や新しい産業の設立、暗い歴史、力をいれている観光など多方面のことについて学ぶことができましたが、ゴミ山に訪れたことは、私にとって一番の衝撃でした。シェムリアップ中から運び込まれた大量のゴミからお金になるものを探す人々、彼らはゴミを燃やすときに出る有害物質や割れたガラスの破片など多くの危険の中で生活していました。人々がいる場所へ近づいて行くほど、私たちは強烈な匂いとハエに囲まれていきました。話を聞かせてくれた現地の子供は、学校に行きたい、元の生活に戻りたいと話していました。ゴミ山で得ることができる収入は、普通に働いた場合より高いという状況を知ったときは、ゴミ山が必要とされているという印象も持ちましたが、まずゴミ山という存在があることが危険なのだと思います。

アンコールクラウ村という農村を訪れたときにも、驚くことばかりでした。様々な植物が家の周りいっぱい実っていて、食べ物に困らないというのはこういうことなのだと実感しました。しかし、食べ物と同様に必要な水の状況はとてもひどかったです。井戸からくみ出された水には、鉄分が含まれていて時間が経つと水の表面に何かの成分が浮かんでいて、その水を飲むと病気の原因になることもあるのだそうです。

アンコール遺跡の修復や教育団体のNGO、日系企業など、日本とカンボジアは強く関わっています。カンボジアが発展していくために、観光業や教育に力をいれるのは必要不可欠です。しかし、環境整備こそが発展のための必要最低限のことだと思います。日本に戻ってきて、日本の衛生面のすごさは実感しました。浄水場やゴミ焼却炉の技術もとても高い。その力をカンボジアに伝えたい、そう感じました。日本に帰ってきてからは、ゴミの分別やリサイクルできる物とかをじっくり考えてしまうようになりました。それでもカンボジアという国に対して私自身にできることは分からないので、まず衛生面への支援を行っている団体について調べて、その団体を支援することから始めたいと思っています。

また、今回のツアーのメンバーに出会えて本当に良かったと思います。大学に入って1年、自分と同じ専攻の人に囲まれていたので、同じ場所を訪れているのにそれぞれが全く違ったところに目をつけていてとても刺激的でした。自分が将来どうなるのかはまだはっきりしていませんが、多くの人と接して、自分の方向性がより明確になったと思います。加えて、自分のふがいなさにも気づけました。一人では生きていけないことも、とても豊かな環境に身を置かせてもらっていることも今、実感することができて本当に良かったです。初めての海外にカンボジアを選んだことは私なりの冒険だったのですが、たくさんのことを吸収することができました。これからも、どんなことにも挑戦していく気持ちを大切にしていきたいと思っています。

「カンボジア研修から学んだこと。」

兵庫県立大学・環境人間学部 1年

この研修を通して、今まで知らなかった数多くのことを学び、自分の狭い世界が少し開けたような気がした。カンボジアで日々経験したことは本当に考えさせられるものばかりだった。1人の人間として、日本人として、学生として、カンボジアで7日間を過ごすことができて良かった。

まず、この研修では自分とは違う境遇の人との接し方について考えることが多かった。特に物乞いの子供や、HIV患者に遭遇した時に考えることがあった。何か力になりたいと思う一方で、何かを「してあげる」という考え自体が上から目線だという気持ちや、自己満足でしかないのではないかという考えもあった。しかし、何日間か経過していく中で考え方が変わってきた。それは、日本が一方的に何かをしてあげているという訳ではないということだ。道行く中で出会うカンボジアの人々は皆、私たち日本人に優しくかった。目が合うと笑いかけてくれたし、日本語で話しかけてくれた。日本語学校では一生懸命に日本語を学ぶ生徒の姿を見た。将来は日系企業に就職したいと夢を語ってくれた子供もいた。私はそこから日本に対する愛情や親しみを感じ取った。いつも私は、カンボジアは日本と比べて発展していないから、貧しいから日本が援助してあげているというような同情の目で見えてしまっていた。だから援助は上から目線だと思っていたけれども、援助は同情ではなく、友情や愛情からきた行動ではないのかと思うようになった。

自分の友達や家族が助けたりするのは当たり前だと思う。カンボジアと日本の関係もそれに近いものだった。それに、日系企業も、日本語学校もカンボジアの人に支えられている。援助は一方的なものではなくて、お互いに協力し合っているという証のように思えた。次に、カンボジアに行って自分の将来についてより考えるようになった。日本人の方がカンボジアで働いているのを見て、日本とは全く違う環境や、言語のもとで生計を立てていくという不安を感じさせない、また環境の違いなんて忘れさせる熱意を感じた。何かをやりたいという気持ちが彼らを突き動かしているように感じた。日本にいる時は、どこが就職しやすいとか、収入が安定しているとか、そういうことも考慮して将来のことも決めていたけれど、カンボジアで働いている日本人の方を見るとそんなことはどうでもよくなってしまった。そんなことは、仕事を決めるのには必要ないと思った。また、やりたいと思ったことでも、どうせ自分にはできないから、とか自分にできることってなんだろうとか、できる、できないの物差しで物事を判断していたけれど、彼らを見て、やりたいかどうかの物差しで物事を判断できるようになった。やりたくてもできないと思うなら、とりあえずやってみて、失敗もたくさんして、努力してできるようになればいい。異国で働いている人の言葉には、日本で同じ言葉を聞くよりも重みを感じられた。

最後に、研修を通して学ぶ姿勢が変わった。いつもは大学で何回も質問するということはなかったけれど、カンボジアでは日本にいる時よりも積極的な姿勢で学べた。ただ、人の話を聞くだけではなくて、自分の言葉で表現し、自分の疑問を投げかけた方が、何倍も学びが深まることを知った。そんな風に変われたのは、一緒に行動してきたメンバーの人や引率の人のサポートもあってのことだと思う。みんなのカンボジアのことをもっと学びたいという気持ちが充実した研修につながったと思う。

この一週間で本当にいい経験ができました。ありがとうございました。

「カンボジアスタディーツアーを通して」
関西大学・文学部 1年

私は今回カンボジアに行き、実際に現地の物を見て、現地の人と触れ合うことでたくさん
のことを知って学ぶことができました。今までアジアについてちゃんと勉強することも知ろ
うとすることもなくただ、自分勝手なイメージで貧しい国だなと思っていました。この旅で
そのような考えは間違いだと分かり、自分の考えが変わりました。

まず、私はカンボジアの人々がとても印象に残っています。カンボジアの人々はとても優
しいと感じました。バスが止まった時やすれ違ったその一瞬の時間でも手を振ってくれる人
がたくさんいました。また、日本では勉強と言えば嫌々する人が多いと思うのですが、日本
語学校で出会った人たちの目はキラキラしていました。農村で一緒に遊んだ子供たちもそう
でした。みんな何事に対しても純粋なんだと思います。純粋だからこそ日本語学校の人た
ちは大きな声であいさつや返事をし、1つのことにたくさんの質問が出てくるのだと思いま
す。私は、このような人たちの姿を見ていると今までの自分の勉強態度が恥ずかしくこれか
ら改めなければならぬと感じました。

次に、KURATA ペッパーで聞いた話が印象に残っています。倉田さん自身の話やカンボ
ジアについての話などいろいろ伺いました。どの話もとても興味深いものでした。その中で
も「自分本位の価値観で見ない」という言葉が忘れられません。この言葉で今まで自分がど
れだけ狭い範囲の偏った価値観でしか物事を見ていないのか初めて理解できました。また、
自分本位の価値観で見ないということがそれに慣れてしまっている私には難しいことだと気
づき衝撃を受けました。

このカンボジアスタディーツアーは普段できないことがたくさんできました。実際にあっ
た物や場所を見てその場で学ぶこと、年齢や大学も違う人とディベートをすること等です。
しかし、私のカンボジアに行く前の予習はそこにあるものがどんなものであるか調べるだけ
でなぜそこに作られどうしてこのような現状に至ったのかを調べていませんでした。それゆ
え、日本に帰ってからもカンボジアのことを知りたいと思い詳しく調べるようになりました。

たった1週間程度のスタディーツアーでしたが得たものはとても大きいと思います。カン
ボジアでのことは日常のほんの些細なことにでも繋げて考えることができます。得ることが
できた新しい価値観や違う文化・歴史は私がこれから社会に出て生きていく上で必ず役に立
つことだと思います。これからは、物事のうわべだけを見るのではなく深く調べその上で自
分の意見を考えるようにしたいと思います。このスタディーツアーに参加してよかったと心
から感じています。

「カンボジアと向き合うこと」

武庫川女子大学・生活環境学部・生活環境学科 2年

私にとって初めて東南アジアに足を踏み入れたのがこのスタディーツアーでのカンボジアでした。今学生であることは自分に使える時間が沢山あることだと私は考えています。この時間をどう活用するかは人それぞれだと思いますが私は今回長期休みを利用し勇気を出してこの企画に参加したことを正解だったと思います。

資料や SNS では見たことのある環境を実際目で見て、現地の人に話を伺い、その場で感じたことを仲間と夜にディスカッションして私の中で確実に考え方の幅が広がりました。想像していた以上に自分の目で見るという事は衝撃を受けることだとも知りました。カンボジアは様々な面を持ち合わせていて、首都では人が集まり栄え、交通量が多くビルが立ち並び始めている一方、農村では飲み水を井戸から汲み上げ動物と共存する暮らしがあり、ゴミ山で生計を立てる家族がいて、また今でも国民の拠り所である偉大な遺跡を築きあげた歴史があり、一方で消えない内戦の傷跡が残され今もなお教育や産業の面でカンボジア国全体としての問題と立ち向かい、「復興」ともいえるべき一面がありました。

今回カンボジアに訪れ沢山勉強させていただき、自分たちに出来ることが何かと考えた時にボランティアがどんなに深い行動なのかと改めて考えさせられました。寄付金や学校建設がボランティアとして大きなイメージだったのですが教育支援や起業者を育てるという事も手段の一つであり、またそのような形で支援している方たちは日本人や他国の立場からではなく同じ人間の立場として、カンボジア人と向き合い理解しているように思えました。簡単に言うことが出来ますが「カンボジア（またその他の相手国）の事を理解する」という事がまずボランティアの前提にあって、そこから足りないものを自分なりに行動していけばいいのだと支援している人たちを見て私は学びました。カンボジアに実際に住んでいる倉田さんが「カンボジアはお金が無くても地球とのフェアトレードが出来ている」という言葉が忘れられません。豊かな日本で生まれ育った倉田さんがこの言葉を言えるにはカンボジアの良い所も悪い所も理解できているからだと思います。また、日本語学校に通うカンボジア人たちが目を輝かせ熱心に勉強している姿は私たちが日本の文化を教えに来たはずなのに「勉強への姿勢」を教えられました。私も同じ学生なのになぜここまで意欲的に頑張ってきたのか恥ずかしくなりました。自己を振り返るという点でもこの旅は私にとって有意義なものになったと思います。カンボジアが抱える問題はまだまだ深刻だとは思いますがそのような現状の中で純粋に人を受け入れ、はにかみながら笑顔で接してくれるカンボジア人は多く、その心の温かさからは問題を感じさせないくらいでした。そこが私はこの国の一番素晴らしい所だと感じています。

旅はあっという間に終わってしまいましたがここで得たものを私は周りの人に伝えることで忘れないでおこうと思います。そして今の暮らしのありがたみを感じながらこれからの生き方に活かしたいです。

「カンボジアに行って学んだこと」

京都女子大学・発達教育学部 3年

カンボジアのイメージといえば、治安が悪そう、アジアの国のひとつ、という漠然としたイメージしか持っていませんでしたが、今回スタディツアーに参加してカンボジアについてさまざまな角度から知ることができて本当によかったです。

例えば、カンボジアに行く前までは「物乞いの子どもたち」といえばただ“かわいそうで不幸な存在”としか思っていませんでした。しかし、実際に物乞いの子どもたちと出会ってみると、自分の思っていたイメージとは全然違いました。確かに、お金がなくて貧しいので観光客に対してすごく物を買って欲しそうにして来ます。しかし、「不幸なのか？」といわれれば決してそのようには見えませんでした。貧しいながらも楽しそうに元気に遊ぶ子どもたちを見て、「幸せとは何なのか？」と考えさせられました。私が思うに幸せとは、視点の問題ではないかと考えました。自分は今まで日本で生きていて、食事も美味しく、水もきれいで、教育だってあたりまえのように義務として受けさせてもらってきました。しかし、そのあたりまえを感じ取ろうとする視点をどれだけ持ってきたのだろうか、と自分を振り返りました。どうしても人間は自分の中にある“あたりまえ”を見ないで、不幸や足りてないところにばかり目を向けて悲観的になりがちなところがありますが、そうではなく、今の自分の周りにある“あたりまえ”に気づき、感謝できること自体が幸せなのではないかと思いました。

また、カンボジアという国全体のゆったりとした雰囲気は私はとても気に入りました。日本にいたら、時間に追われて息苦しくなりがちなのもありますが、そこまで神経質に生きなくてもいいのではないかとカンボジアにいたら思うようになりました。外国に行く際に日本を外から見てみるということをよくいいますが、日本を外から見るということはどういうことなのか分かった気がします。日本にいたら常識だと思っていたことも、海外にいくとまったく通じないこともあるのだと思いました。

今回のスタディツアーでたくさんのことを学び、気づきを得ることができました。大学生という若者である間に海外に赴き、早いうちに様々なことに気づけることはとてもラッキーなことだと思いました。JAPFでカンボジアについて本当に良かったと思います。これからの人生で今回学んだことをぜひ活かしていきたいです。

「カンボジアスタディーツアーで感じたこと」

上越教育大学・院自然系コース 1年

私がこのツアーでカンボジアにいる間感じたことは、この国の人たちはなんて大らかであったかい人たちばかりなのだろうということでした。日本にいる間は知らない人と目が合ったら反らしたり、わざと目が合わないようにするのですが、カンボジアの人たちは目が合うとニコリと笑いかけてくれました。たくさんの笑顔に溢れている印象を受けました。私自身も日本にいるときより気持ちが和らぎました。これは旅行に行く前には思ってもなかったことです。なぜなら、カンボジアという国は私が小さい頃には地雷のニュースがよく報道されており、危険で貧乏な国の印象があったからです。実際に行ってみると、もちろん長い内戦の影響で問題は山積みでしたが、怖い国という印象はなくなり、カンボジアという国が前よりずっと好きになれました。

さて、私がこのツアーを通して最も問題視したのは、“観光業”という面です。カンボジアは観光業が国の財政を支えています。けれども、その観光業に力を入れすぎていることによって、生まれている問題を多く見つけることができました。特に思ったのは、物乞いの子供と郊外にあるゴミ山に住む人たちです。物乞いの子たちは、その日暮らすためのお金を手に入れるために観光客目当てに寄ってきます。彼らは日本語・英語・中国語等を巧みに使い分けて、観光客に売ろうと着いてきます。ものすごい言語能力です。日本であれば小学校に通う年代であるから、学習能力が最も高い時期だからこそできると思いましたが。また、ゴミ山ではガイドさんがそこにいる8歳の男の子にインタビューしてくれました。男の子はつい最近までは村に住んでおり小学校に通っていたが、お金がないために母親と姉と共にゴミ山に移り住んできたといいます。彼はとても寂しそうな顔をして「小学校にもう一度通いたい。」と言っていました。とても8歳の男の子がする表情には見えませんでした。私はそれまでゴミ山は本当に働き口がない人々がしかたなく行き着く場所だと思っていましたが、驚くべきことに街で働くよりも稼げることもあるのだといいます。だからこそ、ゴミ山に住み着く人は後絶たないし、観光として訪れる外国人もいるため国は特に対策を打ち出していないようでした。果たしてこれらは“観光業”と呼べるのでしょうか。目先の利益のみで個人の人権はないのでしょうか。私はただただ疑問に感じることはできませんでした。日本人の感覚なら信じられないことだからです。

私が上記のような感覚を今持っているのは、日本の文化と教育のおかげであると思います。特に教育の大事さはこの旅で強く感じることができました。我々は6歳になれば当たり前のように小学校に通い、同じ空間で同じ内容を平等に教えてもらえます。けれど、それはカンボジアでは当たり前のことではなく、むしろ少数です。教育を受けることで、自分の生き方や間違いなどを選択することができると思います。知識があれば、間違ったことは二度と繰り返さないからです。知識がなければ応用もできません。カンボジアの人々は自国の歴史についても、政権に関わることだからというのでほとんど教えることができないようでした。ならば、過去にあった内戦の事実を知るものはほとんどいなくなり、同じような事態がまた起きてしまうのではないかと私は思いました。

このツアーを通して、教育者を指す身として改めて教育について考えることができ、とてもいい刺激を受けました。また、日本では感じることもない新たな視点を見つけることができ本当によかったなと思っています。これからもツアーで感じたこと、考えたことを忘れずに日々精進していきたいと思っています。本当にありがとうございました。

「8日間を通して学んだこと」

熊本県立大学・環境共生学部・居住環境学科 1年

この研修に参加して自分自身大きく成長できたと胸を張って言える。この研修に参加すると決めた際、周囲に強く反対された。実際私自身も初めての海外旅行ということで楽しみではあったが、不安も大きかった。それは、日本ではカンボジアのマイナスな面、例えば地雷問題や孤児の問題、衛生問題などが取り上げられることが多いためカンボジアに対して貧しい、かわいそうな国というイメージが強かったためである。

実際に行ってみるとこの考えは間違っていた。カンボジアに行くと、あっちを見てもこっちを見ても皆つくり笑顔ではない純粋ないきいきとした笑顔で見つめてくれた。カンボジアは日本と違い、たくさんの人とバイクが行き交い、慌ただしい雰囲気がある。しかしその雰囲気の中に日本にはないあたたかさが感じられた。カンボジアでのバスの移動時間、私は1人1人の表情を見ていたが、誰一人として不幸な顔をしている人はいなかった。みな目をきらきらさせ、上をむいてその日を精一杯生きているように感じた。日本に帰国すると、テレビでは殺人事件のニュース、万引き、詐欺、など悪いニュースがあちこちで報道されていた。「日本のように毎日何不自由なく暮らせる幸せな国に生まれてよかった」とずっと思っていたけど、本当に日本は幸せな国なのだろうかと思いついて疑問に思っている。日本はもちろん他の国にはないほど綺麗な国であり、生活水準も高く、欲しいものもすぐ手に入る何不自由ない暮らしを送ることが出来る。しかしこれが本当の幸せなのだろうか。本当の幸せというものはお金がたくさんあることではないと思う。カンボジアのように自給自足をし、食べることができることや命のありがたみ、生きることができることのありがたみを感じながら生きている、心が満たされているそんなカンボジアの国こそが幸せな国であるのではないかと思う。

カンボジアの研修を経て学ぶこと、考えることが多くあった。カンボジアの遺跡は当時の建築技術に圧倒されたと同時にもっと詳しいことを知りたいと思った。また勉強したくても学校に行くことのできない子どもを目の当たりにし、毎日学校に通って学べることのありがたみを感じた。カンボジアに行くまでは「貧しい国だから日本のような生活ができるように・・・」と思っていたけど、現地の人と話していると住んでいる場所が違えば、環境、文化、季節など価値観も違うので、カンボジアの生活スタイルを否定する考えは間違っているし、今あるスタイルを尊重しながら支援していく必要がある。日本の支援の仕方は学校建設をして終わり、井戸を掘って終わり、このような目に見える支援が多い。「魚を与えるのではなく魚の釣り方を教える」というように目に見える支援をするのがボランティアではないと思う。私は将来現在専攻している建築方面からカンボジアに携わりたいと思っている。永遠にカンボジアに対して支援できるわけではないので、建物をつくって終わりではなく、建築の知識や技術を伝えるようなカンボジアの未来につながる支援をしたい。そのためにも、自身の建築についての知識を高めていく必要があると同時にカンボジアについて様々な面から知る必要があると考える。

「カンボジアスタディーツアーで思ったこと」
神戸市外国語大学・中国学科1年

私はずっと海外に行くことに憧れがあり、これまでにカナダ、オーストラリア、タイに旅行や留学として行きました。タイに旅行したときに私は複数の民族が集まって暮らしている村を訪れたのですが、そこで子供と写真を撮ったときにチップを求められたことに驚き、先進国との違いを感じました。そのことをきっかけにもっと発展途上国のことを知りたいと思うようになり、今回カンボジアスタディーツアーに参加しました。

ツアーを通して最も印象的だったのがカンボジアの人たちのキラキラした笑顔でした。でもその笑顔の中でも見ていて感心する笑顔と悲しくなる笑顔がありました。悲しくなる笑顔というのは今回自分がツアーを通して最も考えた部分でもあったのですが、観光客をターゲットにした売り子の子供の笑顔でした。彼らは物を売っているときは無表情で、どこか遠くを見ているような目をし、ただ商品を買ってもらおうと只管についてきます。そんな中あるツアー参加者がその子供と遊びはじめました。すると表情は一気に明るくなり、自分の売っている商品を置いて楽しそうに走り出しました。その子の年齢は大体7歳ぐらいで、日本だったら小学校で友達と校庭で走り回っている頃でしょう。しかしその子は商品を売らなければ明日を暮らすお金がありません。本当はその子も学校に行って友達と遊びたいのだろうと考えると悲しくてたまりませんでした。

今回ツアーでは様々な研修先で、様々な問題を見ました。どの問題も全く別のものですが、すべてが繋がっています。カンボジアは観光業のみに頼っているところに大きな問題があります。観光業に頼っているために季節によって収入にばらつきがあり安定しない、学校に行く時間もない。学校に行けないから教育が欠如し、伝染病の予防法もわからず病気が蔓延する、自分たちで技術を開発したり起業することができないので国として世界各国と戦うことができない。そういうカンボジアを助けようと日本が関わっていることが嬉しいし、これから自分も何らかの形で絶対に関わっていこうと思っています。しかしカンボジアの目線で。研修中に聞いた「日本人の幸せがカンボジア人にとっては幸せでないこともある」という言葉に感銘を受けました。つまり、これからカンボジアは先進国に近づくのではなく、カンボジアらしく成長していかなければならないのです。日本はあくまでそのお手伝いです。

ここまで様々な問題点を挙げてきましたが、実際に見たカンボジアの人々はいつも笑顔で楽しそうにキラキラしていました。日本にはないものをたくさん持っています。その笑顔が曇らないように成長して行ってほしいです。今回このようにたくさん考える機会を持って幸せです。何かを伝えられたらいいなと思ってカンボジアに行ったけど、逆に色々なものを与えられて帰国しました。本当の幸せとは何なのか自分でよく考えるようになりました。すべての機会、仲間、出会った人々に感謝です。本当にありがとうございました。

「カンボジアインターンシップスタディーツアー」
追手門学院大学・心理学部 2年

幸せなら手をたたく大切さ

8日間の衣食住をともに過ごすことにより、はじめは緊張していたメンバーは緊張がほぐれ、研修先をまわり人々とふれあう中で目を追うごとに、私は自分でも実感できるほどに自身の変化を感じた。

3月のはじめ、気温が1桁台の日本を防寒着姿で出発した自分は、飛行機から降りた瞬間の熱風に驚いた。カンボジアには雨季と乾季しか無い。7時間半の飛行機で、春を飛び越え、冬から一気に夏モードになるため、急いで衣替えを済ませた。日本では出来ない経験をした。たくさんの刺激を受けて英語を勉強したい。1つでも多く生の東南アジアを見たいと思い、空港を出て移動する観光バスの中では、窓に映る世界にくぎづけだった。日本とは違って、コンクリートで舗装されている道は一部であり、道路と商店の境目が無く整備されていない。少し街を走るだけで、信号待ちしている車に物乞いしていく老婆や、ごみを拾い集める男の子の姿が目に入った。観光バスの窓から見える景色は、急速に発展している東南アジアの影であり、自分が予想したとおりの「貧しさ」が存在すること、「苦しんでいる」人々がいるということだった。

気をつけなければならないことだが、日本人である私たちは経済的に発展した国から来たという点から、発展途上国で無自覚のうちに「上から目線」で物事を考えてしまいがちだ。HIV病棟を訪問した際、閉鎖的な空間に足を踏み入れること自体がすごいと舞い上がり、お見舞いを渡して、相手が『ありがとう』と日本語でお礼を言ってくれても、『オークン』とカンボジア語で“どういたしまして”と返事をしてしまった。相手がちゃんと見えておらず、自分は知らず知らずのうちに、モノだけを与える支援者になっていた。

しゃがんで相手と同じ目線に合わせたり、ごみ山の少年とは声のトーンを上げて話したりするといった行為は、本来は内側から自然とあらわれるものであり、心がけてしていれば、それは相手を見下し、軽蔑しているという意味にもなるということに気づいた。

幸せだから手をたたくのだ。行為は後から自然と続く。農村を訪れ、青空教室で学ぶ子どもたちは、「幸せなら手をたたこう」の歌を6番まで知っていた。足をならし、うなずき、アーアーと声を出して、オークンと言う。最後に全ての表現で元気いっぱい唱歌う子どもたちは自然な笑顔で幸せそのものの表情だった。のびのびとした子どもたちと一緒に遊びながら、自分も気持ちを大切に、自己表現ができる大人になりたいと思った。

このメンバーと一緒にカンボジアへ行き、共に過ごせて良かった。運営スタッフ、引率のひろきに感謝です。充実した8日間でした。本当にありがとうございました。